

社会的承認の 再構築をめざして

バブル期以降の経済停滞と新自由主義的な政策のもとで進行した福祉の切り下げによって社会的な格差が拡大している。経済的な困難は社会関係における疎外と分かちがたく結びつき、支援の手が届かず貧困状態にある人びとは、孤立した状態で深刻な困難に直面している。

このような困難が蔓延した状況を「承認不在」社会ととらえてみたい。ここでその不在を問う「承認」は、ドイツの哲学者、アクセル・ホネットが自らの批判理論を構想する際に中核に位置づけた概念である。

ホネットの承認論の射程は広く、①親密圏、②法共同体、③業績主義・能力主義を支えるコミュニティにおける相互承認を、かれは資本主義社会における承認の三つの形式として整理する。ホネットが提示する枠組みで今日の状況をとらえると、ホームレスの人びとや「無戸籍者」のように、すべての形式において承認を得ることが困難な状態を一つの極として、承認の欠落したさまざまな状況を見出せる。経済的にはゆとりのある状況にあったとしても、より良い成績を取るように保護者から圧力を受け、自尊心感情を損なった状況にある子どもも、承認の不在に悩み・苦しんでいる。承認の不在が蔓延する息苦しい社会に対して、また、そこで苛烈な状況におかれた人びとに対して、私たちは何ができるのだろうか。

特集では、「承認不在」社会を生きる子どもたちの姿を明らかにするとともに、承認の不在に抗する草の根の取り組みに光をあて、多くの人が承認されるより望ましい社会への制度化に向けた道筋を模索したい。